

# 中世・草戸千軒探検 11

～食べる～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を紹介しています。

前は食事を準備する調理の様子を、「炊く」のコーナーに展示した資料で紹介しました。今回は、当時の人々の食事に使われた食器について探ってみます。

遺跡からは、椀・皿といった食器類が数多く出土しています。なかでも、土師質土器と呼ぶ素焼きの質素な土器の出土量がきわだって多いことから、従来はこうした土器が日常的な食器の中心を占めていたと考えられていました。いっぽうで、漆塗りの椀・皿は出土量が少ないために、高級な食器として一部の人々に使われたに過ぎないと見なされていました。

ところが、中世遺跡の発掘調査が進むにつれ、漆器が各地の遺跡から広範に出土することが明らかになり、日常的な食器の役割は、おもに漆器が担っていたと考えられるようになりました。また、

大量に出土する土師質土器は、日常的な食器として使われたのではなく、儀式や宴会といった非日常的な共同飲食の場において使われ、一度きりの使用で廃棄されたと考えられるようになっています。

有名な清少納言の『枕草子』では、素焼きの土器である「かわらけ」は「きよしと見るもの」、つまり清らかですがすがしい

展示した食膳具の復元では近年の研究成果を反映し、漆器を食器の中心に位置づけています。

ものの一つに挙げられています。反対に「いみじうきたなきもの」、つまりとても汚いものには、「殿上の合子」(御所で使う漆塗りの食器)が挙げられています。高級な漆器よ



遺跡からは多くの漆器が出土し、日常的な食器として利用されていたことが明らかになりました。

りも質素な土器に清らかさを見いだす感覚からは、漆器が繰り返し使うものであったのに対し、土器が使い捨ての食器であったことをうかがうことができます。

『枕草子』は平安時代中期に成立した作品ですが、そこに記された食器の意味は中世にも引き継がれていたようです。さらに、塗りのない白木の割箸を使い捨てる現代の私たちも、同じ感覚を共有していると考えられます。

(主任学芸員 鈴木康之)



土師質土器の出土状況。同時に出土する播鉢などは破片となっていますが、土師質土器はあまり壊れていません。

一つの遺構から、何千・何万という土師質土器が出土することもめずらしくありません。

